

富山市総合計画審議会第2回活力部会 概要

場所：富山市役所8階 第4委員会室

時間：平成17年11月22日(火)

10:00 ~ 12:00

1 開会

2 部会長あいさつ

長尾部会長 あいさつ

- ・ 前回一通り議論いただいたが、評価指標などは時間が足りなかったように感じている。今回は前回の議論を掘り下げてまいりたい。

3 議事

(1) 部会での主要検討事項について

(2) 評価指標等について

< 概要 >

(部会長) 前回あまり議論されなかった芸術・文化・歴史・工芸等に関することについて各委員から意見ををお願いしたい。

(委員) 芸術・文化活動では、県の事業と重なる部分が多い。県の事業との住み分けはどうなっているのか。

(事務局) 市では、富山市民文化事業団が中心となって、オーバードホールをキーに事業展開をしている。県の文化財団と活動は似ている部分もあるが、市民の自主的活動に対する支援を重点的に行っている。

(部会長) 活動は似ているが、自主的活動に対する支援は市の方が精力的である。しかし、市民に浸透していない部分があるようである。

(事務局) 芸術・文化活動に対する支援は、市民レベルで取り組めないもの、例えば市民芸術創造センター(呉羽地区)を市民の芸術・文化活動の練習や発表の場として整備している。また校区単位では、芸術との出会いづくり事業として子どもが芸術に触れられるような取り組みを行っている。

合併により、それぞれの地域にある文化会館を、42万市民に享受する仕組み、効率的なネットワーク化は今後の課題と認識している。

(部会長) 金沢では21世紀美術館がまちづくりの観点から整備され、多くの利用者があ
る。いかに市民に利用してもらうか、この分野に関してもご意見をお願いし
たい。

(委員) まず、桐朋学園の現状を聞きたい。

次に、文化会館や美術館の分散は良い面と悪い面がある。観光客の多い、長
野県の小布施の例を見ると、食文化と芸術・歴史が集中しており、良い相乗効
果がある。

八尾地域においても、“おわら”だけではなく、他のものと組み合わせるなど
の仕掛けが必要である。

おわら、各美術館、有峰などは市の共有の財産である。新市の行政としてそ
の意識を持つことが必要である。

(事務局) 桐朋学園は、オーケストラアカデミーとして、演奏者の養成課程と、桐朋大
学院大学として、ソロ演奏や教職課程がある。開校後10年経過し、地域に根
付いたのではないかと考えている。

(委員) 桐朋学園がオーバードホール等を利用してコンサートを行うなど、市民全体
が桐朋学園を認識できるような活動はあるのか。

(事務局) 上期・下期に分け、オーバードホール等で定期的に演奏会を行っている。さ
らに出向演奏会等も行い、市民に親しまれるよう努力している。また、卒業時
にも演奏会を行っている。

演奏会の開催については、カリキュラムの一環として位置付けられている。

活動については市広報等でPRしているところである。

(委員) 工芸の分野では、富山職藝学院がある。全国的にも珍しい大工職人を養成す
るものである。職藝学院も“工芸”としてとらえられるのではないか。

富山には、これら専門的な分野を学ぶ場があることをPRする必要がある。

(部会長) 富山には我々が気づいていないものが多い。他にも外国語専門学校やガ
ラス造形研究所もある。

(委員) 後継者育成のためにも、市民へのPRが必要である。また、専門的な分野に
若い人が惹かれる傾向があるので留意すべき。

(部会長) PRの上で、より大きな視点から、各学校を結びつけた総合的な打ち出し方
が必要である。

- (委員) PRに際しては、対外の視点と対内の視点が必要である。
対内的な視点に立てば、地域に“誇り”となる存在があることを市民が知らないということは、非常に損をしていることである。
対外的な視点では、富山にはその情報を発信する“種”が存在しているということである。世界と富山を結ぶには、伝統・芸術・文化が重要である。
先程話のあった金沢はまちづくりの中に21世紀美術館をとり入れ、回遊性をうまく創りだしている。これも“芸術”のうまい使い方である。
芸術・文化を“外”と結びつける方向性が総合計画に必要である。
- (委員) 総合的かつコンパクトに情報発信する必要がある。富山はマスコミの使いかたが下手である。文化はもともとあるものという考え方もあるが、文化は創り出していくものという考えもある。
- (部会長) 芸術・文化のネットワーク化を図れば、十分に“活力”となりうる。活用の切り口によっては、相互連携が図られ、相乗効果も得られるものとする。各地域の施設(ハード)と地域伝統芸能を組み合わせること、それを外に向けて発信すること、市民の認知度を高めていくという視点が重要である。
- (委員) 芸術・文化については、安心部会の教育と密接な関係がある。連携を取って方向性を見出す必要がある。
また、富山には“種”はたくさんあるが、その後の強力な支援が無いため、利用面等で苦戦しているように感じられる。市民レベルに対応していないのではないか。
ガラス工芸の振興は、単なる“芸術”なのか“産業”まで高める視点でいるのか。また、岩瀬地域にガラス工房を整備するような話も聞いているが、集客面ではどうか。力が分散してしまうのではないか。
- (部会長) 富山は芸術・文化等の“種”は多いが、分散していることが課題である。ガラス造形研究所についても、単なる文化として終わらせるのか、産業まで育成するのか、あいまいなように感じられる。
- (事務局) ガラス造形研究所については、現在、ガラス作家を育成し、産業まで結びつける位置付であり、隣接するところにガラス工房を整備しているが、そこから一本立ちする場が無いところが課題である。これについては担当部局で検討しているところである。
- (委員) ガラスを富山で振興しようとした歴史的な理由はあるのか。
- (委員) 売薬に利用する容器に由来し、明治の早い時期にガラス企業が生まれていたようである。

(委 員) そのような歴史があるのに、PR が無く非常にもったいない。

(事務局) PR の仕方には問題があると認識している。桐朋学園については、世界的な演奏者が出てくれば、大きな PR 効果がある。

ガラス作品については、東京の美術館で市の所蔵作品について展覧会を行い、PR に努力している。

各芸術・文化施設が点在しているが、ネットワーク化の一環として、ミュージアムバスを運行しているところである。

(部会長) ミュージアムバスとコミュニティバス、路線バスの連携についてはどうなっているのか。

(事務局) 路線バスの空白地を市民ニーズに併せて補完することになる。ただし、行政でやるべきか、民間でやるべきか、役割分担を考えなくてはならない。

(部会長) 富山は PR ベタと良く言われる。これにより成果があがらず、効果的になっていないのが現状ではないか。新幹線開通に併せて多様な人びとが市内に流れ込んでくるので、この点からも PR に力を入れる必要がある。

また、芸術・文化の振興には育てる姿勢と、民間・行政の支援体制づくりが重要である。

(委 員) 芸術・文化・工芸が発達した地域には、歴史的に出資者 (パトロン) がいた。現在の富山にはそのような者がいるだろうか。

企業経営的な発想に立つと、金沢と富山が同じ土俵で戦えば負けることは目に見えている。金沢には無く、富山にある芸術・文化、例えば “ おわら ” であったり “ 薬 ” に絡んだ芸術であったり、“ 富山の本物 ” を絞るべきである。

芸術・文化に食文化が絡むという話もあったが、食文化は特に県民性に関係が深い。富山では、“ 食 ” に関して言えば、普段は質素に、特別な時には豪華にする傾向がある。平日に客の少ない富山では、“ 食 ” の産業が発展しにくい。

このことも含め、やはり “ 絞り込み ” が必要である。

(部会長) 富山ならではの独自性と、他との差別化が重要である。

(委 員) 富山の独自性という観点では、有峰も独自性が高い。有峰と立山温泉、弥陀ヶ原、更には称名滝へ回遊性を持たせることで、国際的にも滞在型観光にも大きく寄与できると考える。またこれら山岳と北前船に歴史的関係の深い岩瀬の海を結びつけることで、より効果がある。

(委 員) 立山砂防周辺と有峰周辺を整備することは、大きな富山の財産になる。

（委員） 前回発言した趣旨としては、単なる観光の視点ではなく、富山を、“薬を活用した医療都市”として位置付けることが必要としたものである。

（委員） 富山は、いいまちづくりの素材（点）はあるが、連携がない。ガラス工房が何故今の所にあるのか。薬とガラスを組み合わせ、中心市街地に設置するなど必要ではないか。

また、現在のオーバードホールは非常に行きづらい。どの施設を整備するにあたって、小さなまちづくりが必要である。

（部会長） トータルな視野から配置を見直し、コンパクトなまちづくりを行うことは、“活力”に寄与する大きな視点である。

（委員） 上海便等の就航により、外国の観光客が増加しているが、現状は富山を通過してしまっている。外国人観光客を回遊させるためにも、特色を打ち出す必要がある。

（委員） 特色を出すためにも、“おわら”をプロ化し、外国人観光客に常時見せる体制づくりも必要ではないか。

（委員） “おわら”は特別な民謡であり、歌声だけではなく、生活と一体であることで、素朴さや哀愁が最大限に感じられる。プロ化という考えもあるが、歌声を披露するということであれば、既存の民謡クラブ等を活用することも考えられる。

（部会長） “もてなし”のソフト（仕組み）をどのように考えるかが重要である。確かに“おわら”は八尾で見ることに最大の味わいがある。

（委員） 観光面で言えば、限られた財政の中で、従来の行政主導から民間活力を利用することが必要である。行政はサポート役になるのが一番良いのではないか。

（委員） 先程から問題になっている PR については、行政はどの程度行っているのか。

（事務局） 新聞広告を含め、広報や HP などでも PR をしているが、やり方や中身について、より良い方法があれば伺いたい。

（委員） ガラス造形研究所、富山職藝学院などには県内からも来ているはずである。PR については、一体的に発信することが必要ではないか。外に向けて PR するには、特徴を絞り込む必要がある。

また、芸術・文化・歴史・工芸に対して、行政と市民の役割分担はどのようなスタンスでいるのか。

（事務局） オーバードホールの例をとれば、この施設は基本的に“貸し館”である。行政としては、市民の自主的活動と、富山ではなかなか鑑賞できない催しに対し支援している。

また、オーバードホールや芸術創造センターの利用率は決して悪くないと考えている。しかし、市全体の施設でみると、必ずしも利用率が高いものばかりではない。既存の施設の活用は課題の一つとして認識しており、より効果的な活用を検討しなくてはならない。

（部会長） それでは、評価指標について意見ををお願いしたい。

（委員） 施策が決まっていない段階で、指標についての議論は漠然としすぎている。個人的な意見を言えば、民間では成果主義の次の段階に来ている。評価指標や達成指標に縛られなくても良いのではないか。

（委員） やりたいことが煮詰まっていないので、具体的な指標の議論のしようがない。

（部会長） 全般的な指標の意見の中で、前回、特に観光面に関して、広域的指標が必要であるとのことであった。またそのデータの信頼性についても議論があったが、この点についてはどうか。

（委員） 観光客の入り込み数などは、国にも明確な基準（ルール）がない。聞いたところによれば、大手旅行代理店の統計や、入湯税が信頼できるようである。まずは、基準（ルール）を明確にするべきである。

（部会長） データの把握方法（ルール）を明らかにしなくてはならない。観光に関するデータの取りかたは国で議論が始まっているようであるので、“これから”といった感じを受ける。

（委員） 富山市民国際交流協会個人会員数の指標について言えば、42万人富山市の中で、数十名の増減を測るより、富山空港からの外国人観光客数等のほうが良いのではないか。

（部会長） 検討事項が決まってから、全体を通じて指標を検討する必要がある。

（委員） 活力部会として、どのような答えをだすのか。建設計画との整合をとりながら、事業を絞って、具体的な対応策を検討し、答えを出すべき。

（事務局） 新市建設計画を尊重しながら、総合計画の策定を進めていく。

また、今回までの部会で頂いた意見を、次回はある程度基本構想の形として提示したいと考えている。具体の事業等の優先順位などについては、今後の基

本計画、実施計画の審議の中で、議論していただきたいと考えている。

（部会長） 本日はお忙しいところ長時間に渡りありがとうございました。
なお次回は年明け1月下旬から2月上旬に開催したいと考えているので、よろしく願いしたい。

（以上）

4 閉会